

### ～新制大学50年と大学史編纂への期待～ 広島大学羽田貴史氏を招き懇談

本学50年史の刊行に向けて大学史編纂の意義などについて、広島大学大学教育研究センター助教授羽田貴史氏をお招きし懇談会を開催しました。

同氏は、戦前期の帝国大学制度・政策史と戦後大学政策史の研究に当たられるとともに、『東京大学百年史』の編纂に携われた大学史の研究者です。

懇談会は、「新制大学50年と大学史編纂への期待 50年目の大学史の課題は何か」のテーマで、平成10年6月19日（金）に事務局において各部局の部局史編集委員や事務官など約50人が貴重なご意見を伺いました。

今回は、その模様をお伝えし、大学史の一端に触れていただきたいと思います。



『20年ぐらいまでは、大学史というものはあまり研究の対象にもならなかったと思います。それが現在では、いくつかの大学が実証的に大学史の編纂を行っています。私の勤めている広島大学でも、50年史の編纂に取り組んでいます。

日本の大学史編纂の画期的事業として、『東京大学百年史』全10巻の編纂があります。私も、財政史の分野で10年間ぐらい編纂に携わりました。実証的にアプローチすることを、モットーにしていました。通史編と資料編と研究紀要が、3点セットになっていることも特色です。大学史編纂後に、東大では文書資料館として東京大学史料室を開設します。編纂のために調査収集された膨大な資料を、きちんと保存利用できる環境をつくりました。

しかし、『東京大学百年史』編纂の枠組みだけでは決して十分でないと思います。戦前期の帝国大学と全く同

じスタンスで他の大学史編纂に取り組んでいても、「帝国大学史観」を克服するような新しい発見は生れてきません。

そこで、大学史の読者は誰なのかよく考えてみる必要があります。まず、他大学の編纂従事者がいます。また、大学の事務関係者や歴史研究者もいます。しかし、もっと大切な読者として、大学構成員である多くの学生や教職員を忘れてはいけません。大学構成員の大学認識に働きかけていく大学史こそが、期待されます。例えば、その手がかりになるものとして、『プロムナード東京大学史』（寺崎昌男著）や『武蔵野美術大学60年史』への招待』（寺崎昌男講演記録）などがあります。

重要な視点は、「大学」とは何かを問い直すことです。科学史家の中山茂氏が「既成の学問ないしは大学の学部・学科にはア・プリオリ（先天的）な存在理由はない」（中山「展望：大学史 科学史の背景としての」『科学史研究』 -10）

と語っているように、制度上の発展史では大学史の可能性はありません。大学人らがいかなる苦闘や努力をしたのか、教員はそもそもどこから供給されたのか、そのキャリアはどうなのかなどを、きちんと明らかにしなければなりません。このような見方があってこそ、自己点検としての大学史に通じます。

そのためには、いくつか重要な課題が挙げられます。一つは、80年代以降に本格的に調査・整理された国立教育研究所所蔵の戦後教育改革資料や、トレーナー・コレクションやCI&E文書等のGHQ関係資料を大学史の前提とすることです。CI&E文書の中のレギュラー・ウィークリー・カンファレンスなどは、特に重要です。これらの項目事項をきちんと押さえておくだけでも、政策的な主要な流れは理



（次ページへ）

## ～ 新制大学50年と大学史編纂への期待～

### 広島大学羽田貴史氏を招き懇談(つづき)

(前ページから)

解することができます。

ただし、CI&Eの高等教育政策については注意が必要です。例えば、1948年7月6日にCI&Eの教育顧問イー ルズが国立大学設置の11原則案を文部省側に提示しますが、当日の夜に南原繁らがCI&Eの教育課長オーア宅を訪 問して、夕食を交えてその真意を伺ったところイー ルズ案とCI&Eの政策的なずれを実感します。そこで、イー ルズの見解がCI&E全体の高等教育政策と一致していたのかどうか、もう少し慎重に検討してみる必要があと思 います。

金沢では戦後をどう迎えたのかという問題は、個別大学史として非常に大切なポイントだと思えます。旧制高 等教育機関を基にして積極的に展開された北陸総合大学設立運動は、戦後の高等教育政策との関係からみても重 要だと思えます。文部省は、田中耕太郎文部大臣の時に全国を九つぐらいの学区制に分けて、そこに重点的に総 合大学を設立するよう構想します。CI&Eも、1947年12月に旧制の7帝国 大学とそれに類似する国立総合大学 を金沢・中国・四国に設立する案を提示します。いずれの構想案も、政策的には実現されませんでした。戦後の 動きが詳しく記されている『金沢大学十年史』の年表をみると、1948年3月25日に文部省より美術・農の両学 部を除いた医・薬・工・理・法文・教育の6学部編成の指示を受けています。さらに、大学設置認可申請書を 1948年7月末までに提出すればよいところを、金 沢の場合5月末日に「北陸大学設置認可申請書」を提出して います。文部省の新制大学案に対する懸案事項の中でも、金沢大学については何一つ問題ありませんでした。 このような一連の動きをみても、戦後間もなく行われた北陸総合大学設立運動が、1949年の新制大学金沢大学 の設立に大きな影響を与えたものといえます。

また、大学の前史をきちんと取り上げることも重要です。前史を検討していくことは、「新制大学とは何か」と いうことを問うことにもなります。1949年5月31日に「国立学校設置法」の制定によって、突然大学が生れたと いうものではありません。それ以前に、旧制の高等教育機関が存在していて、それらが戦後統合して新制大学を形 成します。前身校の歴史を検討することなしに、新制大学史は語れません。例えば、四高の歴史の中でも、1891 年の帝国議会での高等中学校廃止案などは、地元の存立の動きと合せて軽視することができない点です。

大学史編纂の可能性として、現在重要となっている問題、例えば大学のリメディアル教育(予備教育)の実態 などを、歴史的に明確にしていく視点もあります。また、大学の空間としての形成を学生街の形成から捉えてい くことも重要と思われます。その他、財政問題もできる限り大学史に取り上げる必要があります。一般教育と専 門教育の接続関係についても、現在多くの大学で教養部が改組された状況の中で、新制大学発足時に独自組織を 置かずに、一般教育を各学部の講座で実施しようとした意義も改めて考えてみる必要があるのではないかと思 います。』

以上の他、1947年頃の師範学校の学芸(教育)大学設立構想や、戦後の大学大衆化の動きや、大学内で起った 事件などの記述についても、お話がありました。

## 50年史編纂室

## 日誌抄録

(平成10年4月～平成10年6月)

年月日	内 容
10.5.14	寺倉松男氏(理学部化学科:昭和33年3月卒)資料提供の申し出
5.18	石川県立歴史博物館資料調査(谷本室員)
5.22	編集会議(第14回)開催
5.28	金沢大学健寿会定期総会・創立30周年記念祝賀会開催 50年史及び写真集「金沢大学 写真で見る50年の歩み」の編纂について協力を要請
6.3	樫本英彦氏(四高文甲:昭和20年3月卒)の聞き取り調査実施
6.8	四高関係資料目録(第1版)(金沢所在)の刊行について、石川近代文学館喜田惣一郎理 事長と懇談(橋本委員長、編纂室員) 石川近代文学館四高資料調査(谷本室員)
6.16	深井寛氏より四高資料の提供
6.17	北陸総合大学の金沢城址開設に関するGHQの動きについて大戸宏氏(元北国新聞社記者) と面談(江森委員、谷本室員)
6.19	大学史編纂について懇談会を開催 テーマ 新制大学50年と大学史編纂への期待 50年目の大学史の課題は何か 講 師 広島大学大学教育研究センター助教授 羽田貴史氏
6.22	編集会議(第15回)開催
6.24	羽場究氏(金沢高師:昭和23年3月卒)から金沢高師関係資料の提供
6.29	石川県立図書館資料調査(谷本室員)

## 50年史編纂委員会 委員から

50年史編纂委員会委員 林 宥一  
(経済学部教授)

雑誌『世界』の1960年8月号に、「裏日本の片すみから」という一文が載っている。日米安保条約改定反対の声が日本社会のすみずみをおおっていたとき、金沢大学からの報告である。当時の金沢大学と金沢市の雰囲気がよくわかるので一部を紹介しておく。

Y君

静かな金沢もいま騒然としています。この一週間、市の繁華街香林坊を安保反対のデモがとおらない日はありませんでした。樺美智子さんが死んだ次の朝以来、自発的に受講拒否をした学生が、多い時には約2600名、常時1000名以上も追悼と抗議の市中デモをおこなっています。金沢大学の学生は在籍人数3800名、常時登学者数2500名といわれています。つまり平常の受講者以上の学生が抗議集会やデモにうごいているのです。こうして16日以来講義はできない状態になってしまいました。教官は学園を正常化するために、いろいろ努力していますが、政治情勢が日一日と深刻になるため、いまのところ、どうしようもない始末です。(中略)

中でも、目立ったのは、3日夜、120名を数えた金沢大学教官の参加でした。ぼくの属する法文学部などは全教官の過半数をしめる約50名が参加をしました。おそらく、生涯二度とデモに参加することはあるまいとおもわれるような文学の教官が、この夜だけは一緒に何としても歩いて、安保単独裁決反対の意志をつたえたいといっておつまったのです。ぼくたち教官は八列縦隊にならび、「即時国会解散、大学教授団」という大きなたれ幕をもって、口々にスローガンをさげびながら、デモの先頭にたちました。この大学の卒業生である君がみたら、肝をつぶすような光景がこうしてはじまったのです。

Y君

君も知っているように、金沢という街では慣例をやぶるには大変な勇気がいります。5年前に10名の大学教官がメーデーに参加したことが新聞の特種になったようなところですが、ふだんは温和しい大学教官が100名以上もデモの先頭に立ったことは市民にショックだったようです。この夜、沿道で見物する市民の中から拍手がおこり、デモ隊の前にとびだしてきた中年の主婦が「先生、ありがとうございます、がんばってください」と叫んだのには感激をしました。東京で日常デモをみている君にはおかしなことかもしれませんが、金沢市民としてはよくよくのことです。(以下略)

最後になったがこの報告の執筆者は宮本憲一。肩書きは「金沢大学助教授・財政学」とある。

### 《50年史編纂室からのお願い》

50年史編纂・ニュースレターに関する情報・ご意見・アドバイスなどがございましたら、お気軽に同編纂室までご連絡ください。また、四高や金大の写真や資料などについての情報もお待ちしております。どうぞよろしくお願いいいたします。

金沢大学50年史編纂室  
(本部棟6階)

920-1192 金沢市角間町  
076(264)5284・5288  
076(234)4013  
電子メール(E-mail) yukari@kenroku.ipc.kanazawa-u.ac.jp

## 情報公開と落ち穂拾い



50年史編纂委員会委員

深川 明子  
(教育学部教授)

教育学部史編纂事業を進めるなかで、この機会に、学部の教官に教育学部の歴史に関心をもってもらおうと聞き取り調査を企画した。お話をお伺いしたのは、発足当時から在職され停年を迎えられた小松周吉、深井一郎、東正雄、お三人の名誉教授の方々である。

お話の中でも、人事の話は迫力があり、聞く者も興味をそそられる。生々しい話、幾重にも絡み合った複雑怪奇な話は、当然ありのままに記録されているはずもなく、残された記録にそのようなドラマがあったことを知って、改めて淡々と記された記録の行間を読む面白さを思い知らされたりもした。

しかし、ただ面白いことでは済まされないこともある。それは女性差別の問題である。女性教授が誕生するに当たっては、業績審査以前に、「女が教授になるとはどういうことか」という言葉が公然と飛び交っていたと言う。だが、これは単に教育学部だけのことではないだろう。今、このような“情報”を“公開”しながら、今昔の感に耐えないが、一方、現在でもそれほど変化していないとも思っている。が、ともかく、教育学部の歴史として決して記録されることのない落ち穂、せめてここで拾っておきたいと思う。

“情報公開”と言えば、この機会に大久保英哲教授が、「石川教育大学」構想の資料を発見された。関係書類綴り、関係者の往復書簡、「石川師範学校女子部教官会議録」などからその経緯が明らかになった。このこと自体は大きな収穫であったが、ただ、当時の関係者はこのような形で“情報”が“公開”されることは夢想もしなかったであろう。

そしてまた、私たちの日々の言動や記録も、後世歴史として、“情報公開”される運命を辿ることになる。今はそのいつの日かに、ある期待を込めて思いを馳せている。

## 金大秘宝探検隊

### その四

#### 「幻の飛行機 スタ式イスパースパースイザー200馬力飛行機」

金沢高等工業学校（金沢大学工学部の前身校で、大正9年11月26日に設置）の開校式は、3学年が揃った大正12年6月2日に、またそれに併せて6月2日から4日まで開校記念展覧会が開かれ、同校の紹介と市民の科学知識の普及啓発を図るため校内が一般市民に開放されました。

今回のお宝は、陸軍省から譲り受けたスタ式イスパースパースイザー200馬力という飛行機で、この展覧会のために機械工学科が出品したものです。当時の新聞によると、当時の科学機械工業力を結集したこの飛行機は、訪れた人々の視線を最も集めたようです。

なお、譲り受けたいきさつやスタ式飛行機がその後どうなったかは残念なことに分かっていません。ただ、“戦時期の昭和19年には同校にはなかった”とは言われています。このスタ式飛行機について何かご存知の方は、50年史編纂室まで是非ご一報願います。どうぞよろしくをお願いします。



スタ式飛行機の勇姿



若葉につつまれた校門

また展覧会は、約10万人の観覧者を惹き付けた当地方空前のビッグイベントであつたらしく、当時の新聞も大盛況の様様を次のように伝えています。

“... (中略) ... 2日からの日本晴に第一日曜のこととて人が出るは出るは高工の人気の豪勢なこと大学病院前の電車終点から校門まで色とりどりのバラソルが美しく続き紫錦台の若葉とのコントラストはデリケートな感じを与へながら校門へすはれていつた。”